

清八丁図絵



秋葉神社

田戸から東野へと越える筏師の道沿いにある神社です。立派な石段と石垣が残り、かつては春と秋の例大祭の際には境内で盛大に餅まきが行われていました

筏師の道⑦

天空の集落

水神様の祠

山彦橋

瀬ホテルから歩いて約10分、北山川に掛かる全長83m、川面からの高さ約25mの吊り橋です。真上から見下ろすエメラルドグリーンの川は大変美しく、瀬峡を伝ってくる風も気持ちいいです。田戸側から渡ると川を境に三重県に入り、そのまま筏師の道へと続きます。橋の北側には、水の守り神「水神様」の祠がひっそりと祀られています。



瀬ホテル

ここは元々は1917年に旅館「あすまや」として開業しました。初めの頃は筏師が、そして客層は徐々に瀬峡の観光客へと変わって大変賑わいましたが、2004年に3代目代表の逝去によってしばらく休業。2013年に4代目の現代表が「喫茶 瀬ホテル」として再開し、2021年夏にはリニューアルオープンしました。



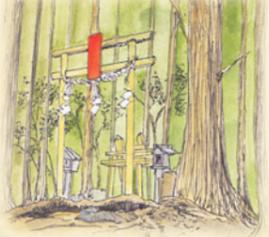
ビューポイント

瀬ホテルから約15分古道を歩いた場所にあるビューポイント。まっすぐな瀬八丁が眺められます。



耳嶋様

尾根上に祭られた耳嶋様は、首の上の健康祈願にご利益があるとされ、昔から地元の人々の信仰を集めています。玉置口、田戸から古道が残っていますが、道標などの案内が無いので、必ずガイドと歩いてください。



耳嶋様④

田戸古道

田戸からハリガネ橋を渡り、瀬八丁の西岸山裾に沿うように残る古道です。田戸から耳嶋様、遠くは玉置山へお参りする際に使われたとされます。比較的きれいに道は残っていますが、所々崩れている上、道標もありませんので、単独行は控え、ガイドと歩くことをお勧めします。

地蔵



ハベ地蔵

尾根上の大きなウバメガシの木ののもとに祀られている地蔵です。ここは田戸地区と玉置口地区、そして耳嶋様と玉置山への分岐点であり、この地蔵も道標地蔵としての役割を果たしていました。「ハベ」とは、ウバメガシの地域での呼び名です。



瀬八丁

熊野川支流の北山川にあり、約50mの断崖、巨岩、奇岩が1km以上に渡って続く紀伊半島屈指の絶景エリアです。瀬ホテルの眼下には、奈良、和歌山、三重の三県境が合わる場所があります。国の特別名勝および天然記念物、そして「南紀熊野ジオパーク」のジオサイトに指定されています。



筏師の道

その昔、山から切り出した材木を組んだ筏で北山川を下流域まで下った後、筏を操縦していた筏師が帰る際に利用した道です。熊野川、北山川流域に車道が開通して以降は通る人もほとんどいなくなりましたが、現在はハイキングができる古道として、広範囲にわたって残っています。(詳細は裏面をご覧ください)



瀬八丁⑥

すべり岩

洞天門

北山川

耳嶋様入口 (バンガロー跡)

国道169号旧道
2021年4月現在
通行止め

筏師の道 木津路入口

瀬八丁のおはなし

踊るタヌキ

昔の瀬八丁は、人気もあまりなく、青黒い淵が不気味に静まり返っていました。しかし、「魚半分・水半分」と言われるほど、たくさんの魚がいました。またまわりの山中には岩穴がたくさんあり、タヌキなどの賢い動物にとっては大変暮らし良い場所でした。ある日の夕方、里人に「青石」と呼ばれている平らな岩の上で、姉さんかぶりをした娘が一人踊っており、それが毎日続きました。それでも里人は、タヌキが踊っていることを知っていたので、「はい、また青石で娘さんが踊っちゃう」と言い、気にも留めていませんでした。

この日もいつものように娘が踊っていました。山仕事の帰り、若者庄右衛門は青石の方角を何気なく見ると、娘がさかんに手招きをしていました。あまりに手招きをするものだから、面白半分に近づいていきました。草をかき分け、やっと青石にたどり着いたとたん、娘がふっと消えてしまいました。草の中に隠れたのか、と探してみたものの、やはり娘はいません。青石をもういちど見てみると、そこには古いわっぱが置いてありました。

「やっぱり人が来ると恥ずかしいいな。」とひとりごとを言いながら、庄右衛門は「これでも鶏のエサ入れくらいにはなるやろう」と、その古いわっぱを拾って帰りました。

次の日の夕方、娘が手招きするので、庄右衛門は娘の方へ行ってみましたが、昨日と同じく娘は消え、古いわっぱ一つだけが置かれてたため、それを持ち帰りました。さらに三日目も同じことが続きました。ところが、三日目に庄右衛門が古いわっぱに手をかけたところ、いきなり手足が動かなくなりました。庄右衛門は金縛りの術にかかってしまっていたのです。庄右衛門の背中を冷たい何かが走りまわりました。そしてその時、ドロドロと恐ろしい山鳴りが始まりまわりました。地面は、山崩れが起こる時のようにユッサユッサと揺れ始めました。生きた心地もしなくなった庄右衛門は「こりゃあ、おれが悪かった。わっぱが置いてあったのは何か食べ物をくれ、ということだろう。それならすぐ持って来てやるからどうか勘弁してくれ。」と、さかんに謝りました。すると、山鳴りも地面の揺れも静まり、庄右衛門の体も楽になりました。

庄右衛門は家に飛んで帰るやいなや三つのわっぱにたくさんの食べ物を入れ、青石の上に置きました。その後、それを三日間続けました。ある晩のこと、庄右衛門が仕事に疲れてうとうとと眠りかけていると、あの娘が夢の中に現れ、「こないだからお前に食べ物をねだったのは、わしが病気で困ってのことじゃ。おかげで今はすっかり良くなった。お礼申し上げます。」と言いました。そして最後に、自分の真の姿を現して消えました。

それからしばらくしてのこと、庄右衛門は出稼ぎに行くと言い、はっぴを着て家を出て行きましたが、それっきり家に戻ってくることはありませんでした。そこへ行ってしまったのかは、現在でもわかっていません。しかし時々、あの娘とはっぴ姿の若者二人が青石の上で踊っているのが見えたとのことです。あのはっぴ姿の若者が庄右衛門であったのだろうか。



瀬のぬし

むかしむかし、幸右衛門という男がいました。男は毎日、毎日瀬八丁に来て、釣り糸を垂らしていました。春のある日、その日も釣りをしていると、「幸右衛門さま」と、軽くやわらかに幸右衛門の肩に手をかける者がいました。幸右衛門が驚いて振り返ってみると、それはそれは美しい女が立っていました。一人暮らしの幸右衛門は喜んでその女を連れて帰り、一緒に暮らすようになりました。女は名前も言わず、自分の身の上も話そうとはしませんでした。ただ幸右衛門の言うとおりに「はい、はい」と言っただけよく働き、仲良く暮らしていました。やがて女は身ごもり、いよいよ子供が生まれる頃になったある日、改まって「お願いがあります。どうか川の辺りの誰にも知られない場所に小屋を建ててください。そこでお産をしたいのです。赤ん坊が生まれたら、必ずあなたの元に返りますから、それまでは見に来ないでください。」と言いました。幸右衛門は不思議に思いながらも女の言うように従いました。

幸右衛門はずっと待ちましたが、もう五日にもなります。もしかして産後の肥立ちが悪くて、戻れないのかもしれないと気になり、矢も楯もたまず足音を忍ばせて小屋の方に行きました。戸の隙間からそそっと中を覗いてみると、何とも大きな蛇がとくろを巻き、人間の赤ん坊を抱いていました。その時蛇が物音に気付いて頭をこちらに向けると、急にもとの愛らしい女になり、赤ん坊を抱いて出てきました。「幸右衛門さま、あれほどお約束したのに。もうこうなっておしまいです。私はこの瀬のぬしだったのですが、余りにも美しいあなたの姿に見とれ…。どうかお許しください。お名残り惜しゅうございますが、さようなら。」ぽかんとしている幸右衛門の前に、紅絹（もみ）に包んだかわいい赤ん坊をおくと、女はさっと水の中へ消えてしまいました。幸右衛門は「待ってくれ」と叫びましたが、女は戻っては来ませんでした。後悔と寂しさとやるせなさに幸右衛門は赤ん坊を抱いて泣きました。朝日ののぼる頃、小舟に赤ん坊を乗せ八丁の瀬を漕ぎめぐる幸右衛門の姿が哀れで涙を誘いました。

「川のぬしさん 八丁の長さ かわいいぬしさん 舟の中」

という歌は、こうした伝説から作られました。



ミスヒョロロ鳥

ミスヒョロロと呼ばれる鳥の話があります。たった一羽だけ赤い色の鳥がおり、名のごとく「ミスヒョロロ」と鳴いていました。この鳥は「親の死に際して水を与えなかった者が天罰を受けて鳥に変えられてしまった」という伝説が囁かれていましたが、今現在は姿を見せることもなく、忘却の彼方へと消えた状態となっています。

筏師の道

瀬八丁はじめ、北山川に沿う一帯には現在も「筏師の道」と呼ばれる古道が残っています。現在では熊野古道と同じく、昔の人の生活をしのぶトレッキングができる道ですが、その昔、この道は名の通り筏師が「帰り道」として利用していたものです。北山村や十津川村一帯の山は非常に良質なスギの産地であり、ここで産出されたスギは京の伏見城、そして江戸城にも使用されたと言われていました。山で伐採した木材を束ねて筏を形成し、北山川に浮かべたあとその筏に乗って下流の新宮にある材木の集積所までを下って行きました。集積所で筏を解いた後、筏師は自らの足で帰って行かなければなりません。その時の道がこの筏師の道でした。川沿いに車道が整備され、トラックが行き来できるようになって以降は筏師はその役目を終えましたが、この筏師のたどった道は現在でも熊野川沿いから北山川沿い一帯に古道として残っています。

瀬ホテルにも、開業当初は筏師の宿泊客も多かったと言われていました。瀬ホテルからは、山彦橋を渡って南方面の木津路、反対側の東野方面の筏師の道がきれいに残っており、古道トレッキングを楽しむことができます。